

～ピアサポーターに聞いてみた～ 精神科ユーザーのホンネ

「『ピアサポ』のことを知ろう!」

リニューアルした「べるぶ」では、「精神科ユーザーのホンネ」と題して、栄仁会に雇用されている『ピアサポーター』の皆さんと対談していきたいと思います。

今回は4人のピアサポーターさんにお話を伺いました!



『ピアサポーター』って、どんなことをしているんですか?

 「『ピア』とは、『仲間』ということで、患者さんに対等な関係で退院支援のお手伝いをさせていただいています。」

 「例えば、入院中の患者さんに自分の体験談を踏まえて社会資源の説明をしたり、座談会のような場で長期入院の方に退院後のイメージを話したり、勉強会や大学の講義などにも参加させていただき、体験談を話したりしています。」

 「月2回、生活訓練いろはのプログラムに入らせてもらっています。みんな楽しく活動ができて、終わった後に「ありがとう」と言ってもらえると、やりがいもあります。」

 「体験談の発表は、自分のことを振り返る場にもなります。長期入院の方に体験談をお話した後、個別に会話をするのが楽しいです。ピアサポーターであることを伝えると、様々な反応もしてくれるし、ピアサポーターを受け容れてもらえているのが嬉しいです。」

 「ピアサポーターは患者さんに対等な関係にあります。患者さんの日常生活のしんどさなど、専門職が理解できない患者さんのことを理解できることが強みだと思います。」

実際に『ピアサポーター』をやってみて、いかがですか?

 「大学の講義などでは緊張しますが、後で学生さんのアンケートなどを読ませてもらうこともあり、いつも発表して良かったと思います。それと、退院支援にはやりがいを感じます。」

 「大学の講義や院内の勉強会などでお話をすることがありますが、自分の体験を誰かに伝えることで、直接自分からその人には届かなくても、間接的に手が届く人が増えると思うと嬉しくなります。こういう形で伝え

られる人が増えるといいな、と思います。ただ、やりたいことがたくさんあって、それができないことに歯がゆさ感じます。」

 「いつも、誰のための支援なのかを考えてしまいます。対人援助はずっとやりたかった仕事で、縁があってやらせていただけていますが、支援している、してもらっている、という関係ではなく、心の通じる仲間同士の繋がりが作れたらと思います。」

 「ピアサポーターは仲間でありつつ、支援者でもあります。当初は、スタッフのやり方をまねてやっていましたが、だんだんとそれでは良くないな、と気づくようになりました。例えばいろはでも、仲間同士で話題になるような会話ができるようになればいいなと思っています。それと、ピアサポーター同士の繋がりというか、チームワークのようなものが作れたら、とも思っています。そして、ピアサポーターがもっと増えたら良いな、とも思っています。」

 「いつもスタッフから助けてもらっばかりで、ピアサポーターが本当に必要なのかと考えてしまうことがあります。それでも、例えばいろはのプログラムで、「ありがとう」と言われると、嬉しくなるし、やりがいにも繋がります。」

 「スタッフの皆さんには、いつも助けてもらっている感じがあります。働きやすいように環境を調整してもらっていますが、それで良いのかと思っています。もっと自分達にできることがあるのではないかと考えてしまいます。」

 「自分たちができることを、自分たちの方から伝えていくことも必要なかもしれないと思い、やりたいことリストを作ってみました。」

 「ピアサポーターが専門職と相互的なものになっていくためには、ピアサポーターのもつ体験の部分が強みなのかと思います。体験談を話す場も必要ですが、患者さんとの体験を通じた交流が大切なのかもしれません。何気ない会話の中での語りこそが、本当のリカバリーストーリーなのではないでしょうか。そんな患者さんに語る場面を、専門職に見てもらうことが大切なのではないかと思います。」

 「もちろん、ピアサポーターもたくさんの体験をしていて、それがトラウマにもなって…。それでも、患者さんにも同じような体験があって、それが自分のリカバリーストーリーと重なることで力になるのだと思います。」

 「やっぱり、専門職の皆さんと対等に支援に関わりたいですね。」

なるほど。専門職との「相互的な関係」は難しそうですが、とても大切なことかもしれませんね。ピアサポーターの持つ「当事者の力」が、個々の支援に活かされていくことを期待したいですね!

◀ 今後も、ピアサポーターの当事者ならではの対談にこうご期待! ▶